

米国1940年代の初等音楽科教科書における 読譜の教育課程

— 1920年代との比較を通して —

川口 さやか

(2007年10月4日受理)

Music Reading Curricula in American Elementary Music Textbooks of the 1940s
— Comparison with the 1920s —

Sayaka Kawaguchi

Abstract. This paper aims to provide an insight to music reading curricula of the 1940s and 1920s. These curricula were selected from textbooks of Silver Burdett Co., Ginn and Co., and American Book Co. In the 1920s music reading was taught chiefly through Singing and Exercises, and correct singing and correct pitch memorizing were emphasized. However it was found that in the 1940s, music reading was taught through a program of five activities viz. Singing, Listening, Motion to Music, Playing an instrument, and Creative activity. The elements of the music were also illustrated concretely. In addition, all curricula of the 1940s provided reading readiness programs in which consecutive experiences of ear and eye were emphasized. The influence of experientialism was a strong factor in the development of the five activity and reading readiness programs.

Key words: USA, 1940s, elementary music, textbooks, music reading

キーワード：米国, 1940年代, 初等音楽科, 教科書, 読譜

1 研究の背景と目的

米国公教育における歌唱教授は、マサチューセッツ州ボストン市の公立学校における唱歌科設立(1838)から始まった。19世紀最後の四半世紀には読譜を重視する教授が広まった¹⁾が、やがて歌そのものが見直され²⁾、子どもたちの美的感動体験が追及されるようになる。その後、マサチューセッツ州ニューベッドフォード市教育委員会は1903年に、マサチューセッツ州教育委員会は1916年に初等音楽科の教育課程を示している

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：三村真弓(主任指導教員), 古賀一博,

柴 静子, 千葉潤之介

が、1921年になると、カリフォルニア州サンタバーバラ市、ミシガン州デトロイト市、ネブラスカ州オマハ市、ニューヨーク州ニューヨーク市、ペンシルヴェニア州ピッツバーグ市教育委員会³⁾からも初等音楽科の教育課程が示されるようになる。このように、1920年代頃から音楽科教育課程の作成が、全国的に拡大している。全国的な団体 Music Supervisors' National Conference (以下 MSNC) が示した1921年の音楽科の教育課程⁴⁾では、歌唱の内容が多くを占めているが、器楽や鑑賞の内容も含まれている。第1学年から第8学年まで、それぞれ目標、教材、方法、達成目標について記されており、読譜の達成目標では、第3学年以上で何割の子どもが視唱できるのかが具体的な数値で表されている。また同じく全国的な団体 Music Educators National Conference (以下 MENC) が示した1940年の音楽科

の教育課程⁵⁾では、聴取、歌唱、音楽への身体表現、器楽演奏、創造的活動という領域に加え、読譜の領域が設定されている。MENC が示した1945年の音楽科の教育課程⁶⁾では歌唱の経験、聴取の経験、リズムの経験、演奏の経験、創造的な経験の5領域が設定され、読譜の内容は、歌唱領域に記されている。ここでは、暗唱から視唱へとスムーズに移行するために必要とされる読譜準備プログラムが、新たに設けられている。このように、1940年代のMENCから提示された読譜の教育課程の特徴として、読譜を独立して考えることと、読譜準備プログラムの設置が挙げられる。以上のように全国的な団体による教育課程が変遷していった一方で、教科書はどのように変遷したのであろうか。

19世紀後期における主な教科書⁷⁾では、歌曲および多数のエクササイズ課題（以下課題⁸⁾）で構成されるものが多く、課題は低学年から与えられた。20世紀初頭の教科書になると、課題を含む比率は低くなり、歌曲を用いて読譜や音楽の要素の学習を行う方法が示され始めた⁹⁾。*Modern Music Series* (1901) や *Hollis Dann Music Course* (1914) では、第1学年の子ども用の教科書はなく、教師用の教科書および指導書が存在した。これらの19世紀後期から20世紀初頭への変遷の要因として、単なる要素の技術的な訓練を避け、聴感覚の育成と、音楽的な感覚の育成を旨としたことが挙げられる¹⁰⁾。1920年代では、引き続き歌曲を用いて音楽の要素や読譜の学習を行う方法が示される。

Phillips (1996) は、1930年代中期から声楽教育に関する記述が指導書で減少し、教師の視唱の方法論に関する知識が減少することを指摘しており、McDermid (1967) は、1930年代後期から器楽領域での読譜指導が声楽領域での読譜指導よりも広く認められたことを指摘している。したがってその前後である1920年代と1940年代では、読譜の教育課程に大きな変化が現れていると推察される。そこで本稿では、1940年代の読譜の教育課程の特徴を、1920年代のものと比較することによって明らかにし、変遷の背景にどのような要因があるのかを解明することを目的とする。時代の推移を明らかにするためには、同一出版社の推移を検討する必要があるため、本稿では19世紀後期から出版が続く、シルバー・バーデット社、ギン社、アメリカンブック社の教科書を対象として、時代ごとの比較を行う¹¹⁾。

20世紀初頭から20世紀中期における複数の出版社を対象として音楽科教科書の分析を行ったものには、Kavanaugh (1982)、Growman (1985)、Sanz (1993) などの先行研究がある。Kavanaugh (1982) は、子どもの声楽概念の発展について分析している。Growman (1985) は、一般音楽の背景を中心として分析してい

る。Sanz (1993) は、鑑賞領域の変遷を分析している。しかしいずれにおいても、教科書に見られる読譜の教育課程の詳細を検討しているものはない。読譜は、音楽科教育において欠くことのできない学習事項である。系統的に指導されなければ児童の読譜能力は育成できない。したがって、本稿では読譜の教育課程の検討を行い、今後の音楽科教育への示唆を得たい。

2 シルバー・バーデット社

シルバー・バーデット社の1920年代の教科書として、McConathy, O. らの *The Music Hour Series* (1927-1931) を取り上げる。また、同社の1940年代の教科書として、McConathy, O. らの *New Music Horizons* (1944-1949) を取り上げる。

2.1 1920年代の読譜の教育課程¹²⁾

指導書をもとに、読譜の教育課程をまとめたものが表1である。

表1 *The Music Hour Series* における読譜の教育課程

学年	学習内容
1 学年	(1)音楽と歌詞の分離、ニュートラル・シラブル（ルー・ラー唱）で歌う。 (2)フレーズの反復を理解する。 (3)親しんだ曲を暗唱によって階名唱する。
2 学年	(1)教科書を見ながら暗唱歌を用いて学ぶ。 (2)Observation Song を用いて学ぶ。 (3)Reading Song を用いて学ぶ。 (4)Study Song を用いて学ぶ。
3 学年	新しくやや進んだ教材を用いて、さらに自立した視唱のための子どもの要求を増しながら、第2学年の過程を繰り返す。
4 学年 5 学年 6 学年	旋律、リズム、理論の問題のなかで、視唱の発展の過程が以下の規則正しい連続に沿って行われる。 (1)問題が生じたところで親しんだ歌曲を復習する。 (2)子どもたちが注意を向けるために、明確に問題を提示し、正しい名前を告げる。 (3)問題を分離し、ドリルを行う。 (4)新曲視唱をする際に、このようにして得られた能力を適応させる。

(*Elementary Teacher's Book*, 1929, pp.11-12より作成)

*表中の□は、大項目を表している。以下、表中で同様を用いる。

表1のように、*The Music Hour Series* の読譜の教育課程は、歌唱領域で組織されている。第3学年から第6学年においても、第2学年同様に、暗唱歌、Observation Song, Reading Song, Study Songなどが用いられる¹³⁾。同一の旋律を含む Observation Song と Reading Song, Observation Song と Study Song を組織することで、系統性をもたせている。歌曲は、主和音、隣接音、8分音符、全音階的な進行、などの学習する要素が定められており、これが月ごとの教育

課程と対応している。

指導書では、近代教育の最終目標は個人の社会化である¹⁴⁾と記し、この双書の目標は、第1に子どもの音楽の経験を広げ、第2に学校や学校以外でも音楽が機能することが可能になることである¹⁵⁾としている。

第6学年用指導書ではマーセル (Mursell, J.L.) と Glenn, M. の *The Psychology of School Music Teaching* (1931) を参照する指示が見られること、デューイ (Dewey, J.) の言葉を引用していることから、この双書にはデューイやマーセルの考えが影響を及ぼしている。

第4、第5学年用の指導書では、社会的なプログラム、偉大な作曲家、器楽、文学、聴取などの幅広い学習が計画されている。しかしこれらの学習は、月ごとの指導過程ではすべて鑑賞領域で設定されている。

Observation Song の教授法では、記譜法を学ぶ時であっても、歌詞唱、ルー唱、階名唱が行われ、組になって現れることが特徴である。Reading Song の教授法では、「1音ごとの教授は避けるべきである」¹⁶⁾と記している。また「この双書の方法は、古い1音ずつの(音程)読みから、新しい言語読み教授への変化であり、単なる文字や言語の理解よりは内容を思考することを重視している」¹⁷⁾としている。一方で、「知識とスキルを用いてトレーニングを行うことは軽視してはならない」¹⁸⁾、「旋律、音程、音型に名前を付けることは、即座に旋律と調の関係を思い浮かべることになる」¹⁹⁾というように、基本的な知識やスキルを軽んじない意向が読み取れる。課題は、指導書の応答唱の課題2例以外は含まれていないが、歌曲から一部を抽出してドリルを行うことが示されている。

2.2 1940年代の読譜の教育課程

読譜学習を行う必要性については、マーセルの *Music in American Schools* (1943) から多数引用されている。マーセルは、「子どもたちが学ぶことができないほど楽譜が複雑であることは真実ではなく、適切で、巧みに計画されたプログラムであれば、読譜の発展が期待できる。」²⁰⁾として、その必要性を説いている。指導書をもとに、読譜の教育課程をまとめたものが表2である。

表2のように、読譜の教育課程では、歌唱、ダンス、聴取、器楽、創作の5つの活動を通して読譜学習が意図されている。これは、指導書序文での、「この双書は幅広い、さまざまな経験を通して子どもたちが、自らの能力や興味に最も適したものを見つけることを目指す。」²¹⁾、「豊かで完全な音楽の経験は、5つの活動なしには育成されない」²²⁾、という考えにもとづくものである。これらには経験主義の影響が考えられる。

表2 *New Music Horizons* における読譜の教育課程

学年	学習内容
1 学年 読譜準備	<ul style="list-style-type: none"> ・暗唱して歌う。 ・“ピーター・ラビット方式” ・旋律(体系的ではない耳と目の経験) トーン・マッチング、フレーズを感じる、フレーズの最後を比較する、など。 ・リズム(リズムバンドによる体系的ではない経験) ・ダンス、聴取、演奏、創造における経験。
2 学年 読譜準備	<ul style="list-style-type: none"> ・暗唱して歌う。(すべて歌曲を模唱によって学ぶ。) ・“ピーター・ラビット方式” ・旋律(体系的ではない耳と目の経験) 長い又は短い、酷似した又は異なるフレーズ、狭い跳躍、など。 ・リズム(体系的ではない耳と目の経験；象徴的な絵) 拍、スイング、小節など。 ・数字譜から演奏、記譜する。 ・ダンス、聴取、演奏、創造における経験。
3 学年 読譜準備	<ul style="list-style-type: none"> ・暗唱して歌う。(すべて歌曲を模唱によって学ぶ。) ・旋律(耳と目の経験) 主和音、隣り合った音、音階のような(全音階)旋律など。 ・リズム(耳と目の経験；リズム記号) 2拍子、3拍子、4拍子、音符、休符など。 ・楽譜の下に示された付加的な音型の学習。 ・子どもたちは、歌曲を学ぶことに寄与し始める。 ・楽譜を見て演奏する、および記譜する。 ・旋律と韻を合わせる。 ・ダンス、聴取、演奏、創造における経験。
4 学年	<ul style="list-style-type: none"> ・暗唱して歌う。(多くの歌曲を模唱によって学ぶ。) ・フレーズパターン、韻との関係。 ・1人で視唱する。 ・旋律(階名、数字譜、音名) ハ長調、ト長調、ニ長調、ヘ長調、変ロ長調(鍵盤図使用)、短調の予備的经验、など。 ・リズム韻律分析(Scansion)、ダンスのリズム、ステップを踏む、手拍子をする、など。 ・器楽のための楽譜を記譜する。
5 学年	<ul style="list-style-type: none"> ・暗唱して歌う。(数曲の歌曲を模唱によって学ぶ。) ・フレーズパターン、韻との関係。 ・旋律(階名、数字譜、音名) 調の学習、パート別歌唱(2声部の輪唱)、など。 ・リズム韻律分析、6/8拍子の復習、音符。 ・和声和音を楽器で演奏する、譜表。 ・オリジナルの歌曲や器楽の楽譜を記譜する。
6 学年	<ul style="list-style-type: none"> ・暗唱して歌う。(数曲の歌曲を模唱によって学ぶ。)形式との関係。 ・フレーズパターン、韻との関係。 ・旋律(階名、数字譜、音名) ハ長調の音階を作る、他の調を復習する。短音階を作る。調号、近親調、平行調。 ・リズム復習。 ・和声和音を歌う、調号のない歌(臨時記号を多く含む)を歌う、など。 ・オリジナルの歌曲や器楽のための楽譜を記譜する。

(*Experiences in Music for First Grade Children*, 1949, pp.140-141, *Accompaniments and Interpretation* 4, 1949, pp.172-173, *Accompaniments and Interpretation* 6, 1949, pp.268-269より作成)²³⁾

加えて、旋律、リズム、和声などのそれぞれの要素ごとの学習も設定し、読譜力の定着を図っている。

序文ではさらに、「ほとんどの子どもは印刷された頁から新曲を学ぶことを喜ぶ。表面的に学ばれたときには容易に読譜への注意が失われる。旋律で表現された音楽の概念 (idea) を理解すべきである。この概念が読譜で重要な部分である。」と記している。そして、音楽的概念をともなった経験が、技術的な1音ずつのドリルを行う方法に優るべきであるとして、この考えを背景にこの双書独自の読譜準備“ピーター・ラビット方式”を設定している。まず、教室の雰囲気は家のようであればならない。その方法は、幼いころ、両親に『ピーター・ラビット』を読んでもらうのと同じように、最初は教科書の頁全体から、絵や旋律の美しさに没頭するうちに、音符を読むことなしに歌曲の雰囲気や、フレーズの流れを理解するというものである。ここでは、目と耳による観察の連続する経験が重視される。以上の学習は、幼い子どもの日常生活に沿って組織された学習であり、読譜準備の考え方や実施方法には児童中心主義が影響を及ぼしていると考えられる。

第2学年の読譜準備では、旋律とリズムに関する内容が大きな学習項目となっている。それぞれの内容を表3および表4に示す。

表3 読譜準備における旋律の経験

要素	学習内容
1 速度	1 歌曲は、素早く又はゆっくり歌われる。
2 音高	2 音は高い、又は低い。
3 ダイナミクス	3 音は大きい又は柔らかい。
4 拍	4 音は長い、又は短い。
5 構造	5 フレーズはまさに同じである、ほぼ同じである、又は異なる。
6 旋律	6 音は上方へ又は下方へ流れる。
7 旋律	7 音は順次進行又は跳躍する。
8 旋律	8 跳躍は広い、もしくは短い。

(New Music Horizons 2, 1944, p.138より作成)

表3の要素には、学習する歌曲がそれぞれ複数設定されており、教科書を用いて学習される。この経験は本質的に耳の観察(耳のトレーニング)であること、識別力のある耳の経験に続いて楽譜を目で追うべきであること²⁴⁾が記されている。

表4 読譜準備におけるリズムの識別

要素	使用教材
1 拍	1 < Yankee Doodle >
2 揺れ	2 < Swing >
3 旋律パターン	3 < Rain Drops >
4 拍	4 < Geese >
5 リズムバンド	5 < リズムバンド >

(New Music Horizons 2, 1944, p.138より作成)

表4の要素の学習にも、学習する歌曲が設定されている。基本となるリズムの効果を耳で識別し、さらに目によって記号との効果を結び付けて考えられるようになってから、音楽の記譜法を学ぶことになる²⁵⁾としている。以上のように読譜準備では、目と耳の経験を重視している。

表1から表4より明らかになった、1920年代と1940年代の相違をまとめたものが表5である。

表5 読譜の教育課程に見られる相違

1920年代	1940年代
○歌唱領域を中心に読譜の学習を行う。	○歌唱、聴取、ダンス、器楽、創造、の5つの活動を通して読譜学習を行う。
○歌曲から抽出した旋律でドリルを行う。	○第1～第3学年に、読譜準備プログラムを設定。(目と耳の経験を重視する。)
○1音1音のドリルではなく、フレーズや音型などの学習を行うことにより音楽的な表現を目指す。	○表面的な学びではなく、子どもたちが自ら興味を持ち、表現していくことを目指す。
○旋律、リズム、理論の学習だけを重視する。	○ドリルではなく、フレーズの学習を行う。
	○読譜のなかで中心となる項目を設定し、具体的な学習内容を示す。(暗唱、読譜準備、旋律、リズム、演奏、記譜、和声など。)

3 ギン社

ギン社の1920年代の教科書として、Giddings, T. P. らの *Music Education Series* (1923-1927) を取り上げる。また、同社の1940年代の教科書として、ピッツ (Pitts, L. B.) らの *Our Singing World* (1949-1951) を取り上げる。

3.1 1920年代の読譜の教育課程

Music Education Series の指導書には、主に歌唱領域を示した *Teachers' Book* (1925)、主に鑑賞領域を示した *Music Appreciation in the Schoolroom* (1926)、概要(週案)を示した *Outlines* (1930) の3種が存在する。*Outlines* では、第2学年第3週以降で毎週、読譜準備や読譜の学習が含まれている。また、週案における読譜の学習は例えば「読譜と音楽の発展 pp.74-78 (教科書)」と記され、学年ごとの到達目標の章における読譜の項では例えば「150頁にわたる163曲」と記されている。指導方法は、*Teachers' Book* を参照するようにとされている。以上のことから *Music Education Series* は、歌唱領域を中心に読譜を行うことが計画されている。*Music Appreciation in the Schoolroom* では、全体的に楽器の学習に主眼が置かれている。そのため読譜の学習には焦点があてられていない。

この双書では、教科書および指導書には、和声課題を除き、課題が含まれていない²⁶⁾。しかし歌曲の配列を工夫することで、読譜学習に系統性をもたせている。歌曲の図式的概略を示したものが、図1である。

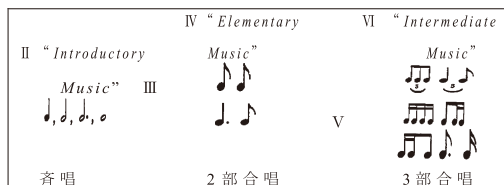


図1 Music Education Series の構成²⁷⁾

図1中のローマ数字は、教科書の巻号を示している。IIは第1段階、IIIとIVは第2段階、VとVIは第3段階と定められている。Iは暗唱歌の学習が中心であり、読譜の準備としても位置づけられているが、大きなプログラムとしては構成されていない。段階が進むごとに声部が増加し、音符やリズムの複雑な歌曲に進む。このように易しいものから難しいものへと要素をもとに配列されている。

それぞれの巻も、簡単な楽譜から複雑な楽譜へと構成されている。例えば教科書第4巻の場合、♪と♪は、斉唱 (pp.93-115)、半音階 (pp.135-151)、2部合唱 (pp.178-185) で設定されている。毎週の学習は、教科書の冒頭から頁に沿って行われる。このことは、音楽の要素を繰り返しさまざまな歌曲で復習することになる。指導書で読譜指導について特に詳細に記述がなされているのは第2学年である。第2学年の読譜の学習内容および教授法をまとめたものが表6である。

表6 Music Education Series における読譜の学習

学年	学習内容および教授法
2 学年	<ul style="list-style-type: none"> ○ 読譜の心理学 ① 旋律の記憶、② リズムの記憶、③ 論理的思考 ○ 第1学年で学んだ暗唱歌で記譜法の学習 ○ 音名の学習。ドリル、個人唱、記譜、口頭のデイクテーションによって、歌曲の音型が学習される。 ・ イ長調、ニ長調、変ロ長調、ト長調、ハ長調が暗唱歌で提示される。

(Teachers' Book, 1925, pp.20-24より作成)

表6のように、旋律やリズムの記憶を重視している。第2学年の読譜指導では、リズムや旋律の音楽的な用いられ方や音楽の価値を鑑賞する力を育成することが記されている。そのため週案の読譜の項目には、「なめらかな音質と正しいフレージング」、「澄んだ音色と表現の豊かさ」といった歌唱表現に関する記述も併記されている。これらは Music Education Series が、

読譜というものを、美しい歌曲の歌唱と深く関連づけて組織しようとしていることを示す。また、この双書の方針は「多くを語らず、より多く歌う。教えることを少なくし、より多く学ぶようにする。」であることや、「暗唱して歌うことを、読譜の予備段階として捉えている。」²⁸⁾、「美しい歌曲を歌うことで、読譜のスキルを獲得する。」²⁹⁾、「多くの歌曲を復習することを通して、子どもたちが読譜の能力を高めていることが分かるであろう。」³⁰⁾と記されていることから、この双書は歌唱活動を通して行う読譜学習を重視している。第4学年以上の読譜学習では、クラス全員で行うルーティーン(シラブル唱→歌詞唱)が含まれている。

一方ドリルについては、「厳格なドリルは好ましくなく、教師は5線譜、音符、シャープ、小節線などを自由に教授すべきである。」³¹⁾と記しているものの、正しく歌唱できない場合には歌曲から抽出してドリルを行うことが指示されている。すなわちドリルをまったく排除している訳ではない。

一般的な読譜の指導過程は、①旋律；繋がりのある旋律を完全になめらかに歌う、②リズム；リズムを読み、旋律を読むことを試みる、③音符；正確に音符を読み、正しい音高で歌う、④歌詞；歌詞を付ける、⑤表現；一部の意味を解釈し、表現豊かに歌う、である。このように正確な音高やリズムの学習を組織している。

3.2 1940年代の読譜の教育課程

指導書をもとに、読譜の教育課程をまとめたものが表7である。

表7のように、読譜の教育課程は読譜準備および発展的アプローチを軸として組織されている。発展的アプローチは、旋律、リズム、和声、トニック・ソルファ又は移動ド唱法で構成されている。それらが段階的に構成されることによって系統性をもった組織がなされている。第1学年読譜準備では、子どもの用いる教科書は2冊あり、それぞれのテーマは遊びと1日の生活である。指導書では、家や家族でのなじみのある経験をもとに新しい音型や旋律パターンが関連されて理解されると記されている。ここには、経験主義が影響を及ぼしている。また、指導書には多数の歌曲が所収されており、幼児期に学んだ旋律パターンとほぼ同形の旋律が22例示されている。この22例のなかで例えば、応答唱—歌唱、レコードを用いる—聴取、縄跳びをする真似—リズム、劇化する—創作、が月別概要に示されている。また、クリスマスに関する曲をリズム楽器で演奏する—器楽、が月別概要に示されている。このように5つの活動を通して読譜準備を行っている。

第2学年の指導書における読譜準備の頁では歌唱、

表7 Our Singing Worldにおける読譜の教育課程

学年	学習内容
1 学年 読譜準備	読譜準備 (1) 旋律の概念 (2) リズムの概念
2 学年 読譜準備	A 一般的な導入 B 読譜の開始 読譜の内容 読譜の発展的アプローチ 旋律, リズム, トニック・ソルファ又は移動ド
3 学年	A 一般的な導入 B 基本的な読譜スキルの発達 C 読譜の内容(創造的な記譜)(選択的聴取) D 読譜の発展的アプローチ 旋律, リズム, トニック・ソルファ又は移動ド
4 学年	A 一般的な導入 B 読譜の発展的アプローチ 旋律, リズム C 読譜への移行期読譜に適用されるトニック・ソルファ又は移動ド唱法 D 導かれる注意深い観察のためのさらなる教材
5 学年	A 一般的な導入 B 読譜の発展的アプローチ 旋律, リズム, 和声 C 読譜の中級段階読譜に適用されるトニック・ソルファ又は移動ド唱法 D 導かれる注意深い観察のためのさらなる教材 E 初級のオーケストラ
6 学年	A 一般的な導入 B 読譜の発展的アプローチ 旋律, リズム, 和声, 読譜に適用されるトニック・ソルファ又は移動ド唱法 C 読譜の中級段階 D 器楽プログラム

(The First Grade Book, 1949, p.x x ii, Guide and Teaching Suggestions K-3, 1952, pp.iii-iv, Guide and Teaching Suggestions 4-6, 1952, pp.iii-vi より作成)

リズム活動、器楽学習を通して読譜を行うことが記されている。聴取と創作は他領域と関連させる内容が示されている。

第3学年では、5つの活動を通して読譜指導を行うことが示されている。第4学年では、歌唱、リズム、器楽、創作の学習で読譜指導を行うことが示されており、聴取との相互関連についても記されている。第5学年および第6学年では、5つの活動を通して読譜指導が行われることが示されている。このように、読譜の教育課程はさまざまな領域の活動で組織されている。

読譜の発展的アプローチは、音楽的な表現のなかで具体化される音楽的な意味と価値に対して、学習者が鋭敏になること、想像力に富むことを重視している³²⁾。このように真の音楽的な経験の獲得が目ざされている。

第2学年の歌曲には、音階のような旋律、和音のモチーフ、調の感じを強調するようなフレーズを含めたものが存在する。第3学年の歌曲には、音階のよう

な旋律や和音のモチーフを含めた歌曲がある。このように、特徴的な旋律パターンが学年を追って現れており、系統性をもたせている。指導書には、音符ごとに分離された歌曲学習を行うことは、親しんだ歌曲の旋律パターンから学習すること、すなわち歌唱を楽しむことから遠ざかると記されている。このように1音ごとの学習ではなく、親しんだ音型の学習を重視する。

発展的読譜アプローチの論述の出典には、マーセルの *The Psychology of Music* (1931) と *Education for Musical Growth* (1948)、およびピッツの *The Music Curriculum in a changing world* (1944) がある。ピッツは自身の著書で、デューイの *Art as Experience* (1934) の引用を多数用いている。このことから *Our Singing World* は、デューイの経験主義の影響を受けていることが明白である。

読譜準備における旋律とリズムの概念の学習についてまとめたものが表8および表9である。

表8 読譜準備における旋律の概念の学習

要素	学習内容
旋律	a 一般的な旋律の概要 b 旋律の動き(上行, 下行, 交差)
音高	c 音高の違い
ダイナミクス	d 強度(大きい, 柔らかい) e 音量(大きい, 小さい)
音質	f 音質(音色; 変化; 雰囲気)
調性	g 調の感覚(カデンツなど)

(The First Grade Book, 1949, p.x x ii より作成)

表9 読譜準備におけるリズムの概念の学習

要素	学習内容
a 構造	親しんだ動きの形式(歩く, ステップを踏む, 走る, ギャロップをする, 小走りする, 自転車に乗る, 跳ぶ, など。)
b フレーズ	一般的な動きの大きなグループのバランス(大きく一層するような動き, 波のようなフレーズの流れ, など。)
c 拍	アクセントの付いた, また付いていない拍の規則正しい再現(重い, 軽い強勢)
d 速度	速度(速い-遅い)
e ダイナミクス	力強い動き
f 持続	一般的な持続時間の概観(短い-長い)
g リズムパターン	典型的なリズムのパターン(歩く, 走る, スキップする, など。)

(The First Grade Book, 1949, p.x x ii より作成)

表8のように、旋律の概念の学習は、シルバー・バーデット社同様に、音高、ダイナミクスなどで構成されている。表9のように、リズムの概念の学習では、拍や速度、リズムパターンなどの学習が意図されており、ギャロップや走るなどの身体的な活動を通じた学習も意図されている。さらに自転車に乗る、ステップを踏

むなどの、日常生活で行われる活動と関連させていることから、子どもたちはより具体的にリズムを理解すると推察される。教科書は主題ごとに配列されており、子どもの興味や関心に配慮している。これらには児童中心主義の影響が考えられる。

図1、表6から表9より明らかになった、1920年代と1940年代の相違をまとめたものが表10である。

表10 読譜の教育課程に見られる相違

1920年代	1940年代
○リズムや旋律の使い方および価値を鑑賞することを目ざす。	○鋭敏な、創造力に富むアプローチを重視し、音楽の表現に具体化された、音楽的な意味と価値を把握することを目ざす。
○歌唱領域を中心に読譜の学習を行う。	○歌唱、リズム、創作、聴取、器楽の5つの活動を通して読譜学習を行う。
○正確な歌唱や正しい音高の記憶を重視する。	○第1,第2学年に読譜準備プログラムを設定。(耳と目の識別,身体表現を重視する。)
○歌曲から抽出した旋律でドリルを行う。	○1音ごとの学習ではなく、特徴的な旋律パターンに着目した学習の連続性を重視する。

4 アメリカンブック社

アメリカンブック社の1920年代の教科書として、*Foresman Books of Songs* (1925-1931)を取り上げる。また、1940年代の教科書として、Beattie, J. W. らの *The American Singer* (1944-1948)を取り上げる。

4.1 1920年代の読譜の教育課程

Foresman Books of Songs の指導書では、「歌曲学習 (Song Study) の方法: 読譜の学習」という記述が見られることから、歌曲学習の内容が読譜の教育課程を表していると考えられる。双書全体が歌唱指導を中心としているため、器楽や鑑賞領域の内容はわずかで、読譜の教育課程は見られない。したがって読譜は主に歌唱領域で学ばれる。指導書をもとに、読譜の教育課程をまとめたものが表11である。

表11のように歌曲および課題で読譜指導が計画されている。第1学年の指導書では、歌曲と課題を用いる目的として、①容易な、正しい記憶、②容易な、正しい反復歌唱、③雰囲気、旋律の特徴の感受、④表現豊かな歌唱が挙げられている。課題は、単なる技術的な学習になることを避け、独立した視唱ではなく、暗唱をもとに音楽の要素の学習を行うようにと付記されている³³⁾。課題の内容は、音程、和音、テーマ、半音階などであり、全体的に構造の学習が重視されている。

表11 *Foresman Books of Songs* における読譜の教育課程

学年	学習内容
1 学年	① 導入: 親しんだ歌曲, リズムのエクササイズ, 音高のトレーニングを行う。 ② 基本となる歌曲と課題 (音階や和音の課題) を用いる学習。 ③ 補助的な歌曲を用いる学習。
2 学年 読譜準備	○ 歌曲を用いて, 音程, 音階などを学ぶ。 ① 基本となる歌曲, ② 復習の曲, ③ 補助的な歌曲が示されている。 ○ 特別な場合に使用する課題 10 題 (音階のような, アルペジオのような旋律, 4/4, 3/8, 6/8, 4/4 拍子の学習)
3 学年	○ 歌曲の使用 <i>First Book</i> pp. 5-35 暗唱歌 (耳のトレーニング→記譜法)。 <i>First Book</i> pp. 36-55 平易な曲 (記譜法から学習する)。 <i>First Book</i> pp. 56-124 時おり暗唱する曲。(指導書の課題も用いる。)
4 学年	○ 歌曲学習の方法 ・ 技術的な要素を音のグループから学ぶ。 ・ 歌曲の形式を表現するなかで, 音高, 拍の関係を学習し, 分類する。 ・ 調号と拍子記号を理解する。 ・ 歌曲の形式を意識して観察し, 比較する。(指導書の課題も用いる。)
5 学年	○ 歌曲学習の内容 (a) それぞれの歌曲のなかで繰り返される構造の観察と分析。 (b) 初めて得た旋律のなかで, 独立した記譜法の使用を行う。 (c) 2 声部の学習をより明確化する。 ○ 拍子の教授のための概要 (4/4 拍子の構造など), 音高の問題。(指導書の課題も用いる。)
6 学年	○ 歌曲学習の方法 1 子どもたちが雰囲気を感じる準備を行う, もしくは強く感じるために, 歌詞を全員で読む。 2 叙事的な音をクラスで話し合う。 3 子どもたちに, 構造の詳細と関係を観察させるために歌曲の形式の構造を見るように促す。 4 クラスに, 視唱するように促す。 ○ 音階構造, 新しい調の構成。(指導書の課題も用いる。)

(*Manual for First Grade Music*, p.4, *Manual to Accompany A Child's Book of Songs*, p.5, p.18, 107, *Manual to Accompany Books of Songs*, p.45, p.82, p.120, pp.157-158 以下作成)

第2学年を読譜準備 (preliminary-sight-reading) ととらえることが指導書に記されているが、大きなプログラムとしては構成されていない。第2学年では、①基本となる曲、②復習の曲、③補助的な歌曲、の3種が1グループになって、54グループが示されている。それぞれのグループでは、音程、歌曲の雰囲気、調、拍子などの学習が設定されており、①、②、③の歌曲で繰り返し学習することが計画されている。第2学年指導書の序文では、十分な練習と方向性をもった模唱は読譜の開始になるとしており、歌の反復歌唱がドリルと同義であることが分かる。第1学年にも、歌曲間で関連のある歌曲が含まれている。また第3学年以上では、新曲、親しんだ曲、および視唱の課題に連続的に関連して、読譜学習が行われる。このように歌曲を用いて系統的な読譜の学習が組織されている。

また例えば第1学年では、ルー唱やラー唱と歌詞唱は組になって提示される。ルー唱やラー唱を行うことは、1910年代の教科書の指導書に見られた、純粋に音楽の特徴へ注意を集中させるために、フレーズの注意深い観察を行うという基本原理にもとづく指導³⁴⁾であり、依然として継続されていることが分かる。

第1学年のリズムのエクササイズは、行進曲やワルツを通して行われる。また音高のトレーニングは、歌曲から単音、反復される音、音階などを抽出して行われる。このように、子どもたちにより音楽的な学びを保障している一方で、従来の読譜指導法を残している。

4.2 1940年代の読譜の教育課程

The American Singer は、暗唱歌、鑑賞プログラム、器楽プログラムなどの項目ごとの指導課程に加えて、ユニット計画（6, 7週分の指導計画）が示されている。読譜の内容は他の領域と同様に独立してユニット計画のなかに明示されている。この双書では、歌曲が暗唱歌、Rote-Note Song、Note Songの3つに区分がされている³⁵⁾。読譜はNote Song および Rote Note Song を用いて学習される。そのため読譜の具体的な内容は、Note Song の教育課程にも現れている。また、第1巻では、読譜の準備段階であるため、暗唱歌にその内容が現れている。指導書をもとに読譜の教育課程をまとめたものが表12である。

表12のように、読譜の教育課程や Note Song の教育課程では、読譜の学習において何を学ぶのかという具体的な要素を挙げている。特に第4巻と第5巻における旋律とリズムのパターンに焦点を当てた読譜学習の設定が特徴的である。読譜の教育課程や Note Song の教育課程では、歌唱活動をとおした読譜の学習が中心である。しかし Note Song は、聴取、リズム、器楽、創作の学習でも用いられる。例えば第3巻では、同一曲が、読譜学習では調の学習を、リズム学習では拍子を、聴取ではフレーズの終わる感じを学習する計画がなされている。つまり、読譜で学ぶ内容がリズムや聴取領域でも計画されている。さらに、創作活動のなかには、①創造的な旋律、②旋律、③リズム、④聴取、⑤オーケストレーション、楽器作り、器楽の学習項目が含まれている。①では旋律の作曲が、②と③では音楽の要素の学習が、④ではフレーズの反復を理解する内容と拍を感じる内容が、⑤器楽作りの学習では、楽器演奏をともなった旋律パターン³⁶⁾の学習が含まれているため、読譜で学ぶ内容が、器楽や創作領域でも含まれている。以上のように、読譜は他領域の学習と密接な関係にある。したがって、表記上の読譜の教育課程では歌唱を中心としている教育課程であるが、実践上

表12 *The American Singer* における読譜の教育課程

巻号	学習内容
1巻	<ul style="list-style-type: none"> ○音高のトレーニング ○旋律に関する暗唱歌、リズムに関する暗唱歌の学習（行進曲、ワルツなど。）
2巻 読譜準備	<ul style="list-style-type: none"> ○Rote Note Song を歌うことを通して、楽譜を子どもたちに紹介する。 ○ホ長調、変ホ長調の主和音。 ○ヘ長調の和音、全音階、レの音と隣接するミとドの関係。 ○ファの音と隣接するソとミの関係。 ○ラとその下方の隣接音であるソの関係。 ○ト長調、イ長調、ニ長調、ホ長調における平易な曲を読む。 ○旋律のパターンの学習。
3巻	<ul style="list-style-type: none"> ○主和音や音階のような旋律で作られた Note Song を歌うことを通して記譜法を子どもたちに紹介する。 ○ホ長調、変ホ長調、変イ長調、ヘ長調、ト長調、ハ長調、イ長調、ニ長調の学習。 ○3度音程、和音、音階の旋律パターンを5線譜上に作る。
4巻 旋律 リズム	<p>〔Note Song 準備〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ○2巻、3巻に見られた主和音と音階のパターン。 ○主和音以外の3和音（復習）。 ○4度、5度、6度、オクターブ。 ○数学的分割に従った拍の連続。 全音符、2分音符、付点2分音符、4分音符、8分音符。 ○自然的短音階。 ○8分音符をともなう付点4分音符のパターン。 ○輪唱と歌（ディスクント）。 ○シャープの半音階。 ○第1拍以外から始まる曲。
5巻 旋律 リズム	<p>〔Note Song 準備〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ○2声部歌唱 ○6/8拍子〔Note Song で紹介する。〕のなかでリズムパターンを見つける。 ○新しいリズムパターンを見つける。16分音符を伴う8分音符のパターン。 ○オーケストラの伴奏を伴って歌唱する。 ○視唱によって Note Song を歌詞で歌う。
6巻	<p>〔Note Song 準備〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ○和声的短音階。 ○シンコペーション。 ○1拍の4分割（16分音符）。 ○1拍の3分割（3連符）。 ○リズム詠唱。 ○3声部歌唱。

(*The American Singer Book 1*, 1944, p.3, *Guide and Accompaniments to the American Singer Book 2*, 1945, pp.18-20, *Book 3*, 1947, pp.15-19, *Book 4*, 1947, p.7, *Book 5*, 1947, p.6, *Book 6*, 1948, p.5より作成)

は、歌唱、聴取、リズム、器楽、創作の5つの活動を通して読譜の学習を行う計画が成されていると言える。以上のように子どもたちの音楽的経験の拡大に配慮されており、ここには経験主義の影響が考えられる。

この双書の指導書冒頭には、第1巻を除き、音楽は言語であることが記されている。第6巻指導書の冒頭ではさらに、スキルと知識を十分身につけることや、言語の基本的な使い方、すなわち読むことと書くことの重要性が記されている。また、「音楽は最初に聴覚

の経験を通して学ばれ、模倣で学び、第2、第3学年終了時ぐらいいまでは、旋律と記号の意味を関連付けて学ぶようになる、これらの初期の旋律とリズムの関連が第5学年の終わりまで注意深く構築される。』³⁶⁾と記して、その後10項目の一般的なアプローチを掲げている。このアプローチのうち、第4の旋律の語彙と第5のリズムの語彙は、読譜の学習である。このように読譜が言語の読み書きの学習と同様に捉えられている。

読譜準備に関しては、①シンプルな歌曲の広大なレパートリーを歌う能力の育成、②単音と音楽のフレーズを素早く正確に模倣する能力の育成、③リズムパターンに反応しながら、リズム感覚と身体のコントロールを発達させること、④歌詞、親しんだわらべ歌や短い詩などを読むなかでスキルを発達させること、が目ざされている。これらのことから、正確な歌唱のみならず、身体的な反応や視覚、聴覚的な感覚の育成をも目ざしていることが分かる。指導書では言語習得の過程について幼児の例を挙げ、これを読譜準備の設定に援用すべきであると提案している。身体的な反応を伴う学習や言語習得の過程を援用することには、児童中心主義が影響を及ぼしていることが考えられる。

表11および表12より明らかになった、1920年代と1940年代の相違をまとめたものが表13である。

表13 読譜の教育課程に見られる相違

1920年代	1940年代
○課題と歌曲を用いて、音楽の要素の学習や読譜を行う。	○歌唱、聴取、リズム、器楽演奏、創造、の5つの活動を通して読譜学習を行う。
○リズムのエクササイズ、音高のトレーニング、ドリルを行う。 ○正確な歌唱、旋律の記憶を重視する。 ○歌曲の構造の学習を重視する。	○読譜レディネスプログラムを設定。(正確な歌唱、目、耳、身体的な反応を重視する。) ○旋律やリズムのパターンの学習を重視する。

5 1940年代の教育課程の特徴

1920年代との比較によって、1940年代の読譜の教育課程について以下のような特徴が明らかになった。

第1に、1920年代は、読譜の教育課程は歌曲の学習との混在が見られる。これに対して1940年代は、シルバー・バーデット社およびギン社では、読譜は他の領域と同様に独立した領域として教育課程が構築され、アメリカンブック社はユニット計画で読譜は他の領域と同様に独立して立案されている。より具体的な要素の学習が提示されるように変化した。

第2に、1920年代は、読譜は主に歌唱領域と密接に関わって組織されているのに対して、1940年代の読譜

の教育課程は、歌唱、リズム、聴取、器楽、創作の5つの活動で行うよう組織されている。このようにすべての領域のなかで読譜が行われることは、経験主義の考えにもとづいたものである。

第3に、3社ともに読譜準備が設定されている。これは子どもの心身の発達を考慮した結果であり、児童中心主義の影響が認められる。

第4に、1920年代ではドリルを行っていたものが、1940年代ではドリルを行わない傾向へと変化している。1940年代は、主にリズムや旋律の要素に焦点を当てて、それらの指導方法を具体的に示す方向に移行している。そのため1940年代では、音階、隣接音、主和音など子どもに学ばせたい要素を含んだ歌曲があらかじめ設定されており、要素が繰り返しまざまな歌曲に現れる方法がとられた。読譜準備では、何度も特徴的な音型が現れ、目と耳の経験を増加させる方法をとっている。このため読譜準備から読譜へのスムーズな移行が可能になっている。

以上のように、1940年代の音楽科教科書における読譜の教育課程から見られる特徴4点は、ともに音楽的な経験の拡大に配慮しており、その背景には経験主義が強く影響を及ぼしていると考えられる。さまざまな活動のなかで読譜の学習を行うが、それらの計画とともに、読譜の教育課程を独立させて考え、子どもたちの学習する要素を具体化すること、低学年でより音楽的な学習を探求すること、教科書は歌曲集のような形態をとるものの、音楽の要素の連続した学習が行えるような指導を、幅広い領域のなかで組織することは、今後の我が国の音楽科教育へと示唆を与える内容と考えられる。

【注および引用文献】

- 1) Birge, E. B., *History of Public School Music in the United States*, MENC, 1966, pp.113-143
- 2) Gehrkins, K. W., "The Evolution of Public School Music in the United States", *Music Supervisors' Journal*, Vol.10, No.3, 1924, p.12
- 3) <http://www.oclc.org/default.htm>, および Board of Education City of Detroit, *A Tentative Course of Study in Music for the Elementary and Intermediate Grades*, 1921
- 4) A Standard Course in Music, *Journal of Proceedings of The Fourteenth Annual Meeting*, MSNC, 1921, pp.220-231
- 5) Outline of a Program for Music Education, *Year Book 1939-1940*, MENC, Vol.30, 1940, pp.132-133

- 6) The Music Curriculum of the Elementary School, *Music Educators Journal*, Vol.32, No.4, 1946, pp.32-33
- 7) 例えば, *Loomis's Progressive Music Lessons* (1870-1887) や Mason, L. W. の *National Music Course* (1889) などである。
- 8) ここでは, 歌詞の付されていない歌曲のことを, エクササイズ課題とする。しかし歌詞の付されていない場合でも, 子守歌や民謡は歌曲とする。
- 9) 例えば Smith, E. の *Modern Music Series* (1901), Parker, H.らの *The Progressive Music Series* (1914-1915) などである。
- 10) J. デューイの生活経験を重視する思想や G. S. ホールらの児童研究運動が影響を及ぼしていることが考えられる。
- 11) 19世紀後期, シルバー・バーデット社は, Holt, H. E. の教科書を, ギン社は, Mason, L. W. の教科書を, アメリカンブック社は Loomis, G. B. の教科書を出版しており, これらは広範に用いられていた。また1960年代, 1970年代まで繰り返し音楽科の教科書を出版し続けた点でも3社は共通している。
- 12) 本稿では, 教育課程という用語を主に, 学年ごとの学習内容と指導法をさして用いている。より具体的に表すために, 表中では使用教材, 学習項目, および学習活動などを加えて記している。
- 13) 暗唱歌は暗唱して学ぶ歌, Observation Song は何か新しいトピックを含む歌 (2, 3年), Reading Song は読むための歌, Study Song (2, 3, 5, 6年) はさらに複雑な構造をもつ歌をさしている。
- 14) McConathy, O. et al., *Intermediate Teacher's Book*, Silver Burdett Company, 1931, p.11
- 15) McConathy, O. et al., *Elementary Teacher's Book*, Silver Burdett Company, 1929, p.5
- 16) *ibid.*, p.44
- 17) 14) と同書, p.18
- 18) 15) と同書, p.29
- 19) 17) に同じ。
- 20) *Teachers' Manual for Primary Grades*, 1950, p.55
- 21) 20) と同書, Introduction
- 22) *Accompaniments and Interpretation 2*, Silver Burdett Co., 1948, iii
- 23) *Experiences in Music for First Grade Children* は, *New Music Horizons* の第1学年用指導書である。
- 24) McConathy, O. et al., *New Music Horizons 2*, Silver Burdett Company, 1944, p.138
- 25) *ibid.*
- 26) 指導書には和声課題が14題含まれているおり, 第6, 第7, 第8学年で用いることが計画されている。
- 27) Giddings, T. P. et al., *The Teachers' Book*, Ginn and Company, 1925, p.133
- 28) 27) と同書, p.20
- 29) 27) と同書, p.28
- 30) Giddings, T. P. et al., *Outlines*, 1930, p.31
- 31) 27) と同書, p.28
- 32) Pitts, L. B. et al., *Guide and Teaching Suggestions K-3*, 1952, p.184
- 33) Foresman, R., *Manual to Accompany Books of Songs*, 1927, p.41
- 34) *The Progressive Music Series Teacher's Manual Vol. I*, 1918, p.11
- 35) 暗唱歌は暗唱して学ぶ歌, Rote Note Song は, 最初暗唱で学ばれ, 何度も反復学習を行い, 後に教師の支援なしに容易に理解できるようになるための曲, Note Song は, 子どもたちが教師の支援なしに理解し, 読むことができる曲をさしている。
- 36) *Guide and Accompaniments to the American Singer Book 6*, 1948, p.3

【参考文献】

- Growman, F., "The Emergence of the Concept of General Music as Reflected in Basal Textbooks: 1900-1980", D. M. A. dissertation, The Catholic University of America, 1985
- Kavanaugh, J. M., "The Development of Vocal Concepts in Children: The Methodologies Recommended in Designated Elementary Music Series", Ph. D. dissertation, North Texas State University, 1982
- McDermid, C. M., "Thaddeus P. Giddings: A Biography", Ph. D. dissertation, The University of Michigan, 1967
- J. L. マーセル, M. グレン, 供田武嘉津訳, 『音楽教育心理学』, 音楽之友社, 1976
- Phillips, K. H., *Teaching Kids to Sing*, Thomson Schirmer, 1996
- Sanz, K. D., "A History of the Approach to Teaching Listening in the Elementary Schools as Reflected in the Elementary Textbook Series Published from 1900-1990", Ph. D. dissertation, University of Colorado at Boulder, 1993